

伝統芸能

花鼓 はなつづみ

文楽の心の中ものに登場する (真途の飛脚)、「小春・治主人公は皆いい男だが、金に縁のない、気の弱い「だめんず」。一方、ヒロインといえは恋に一途で、けなげな「賢女」。これが、通り相場である。文楽を観た女性皆、

「なんであんなアホな男を好きになり、心までしてしまふの?」と思うらしい。

心の中ものの代表的なカップルは「お初・徳兵衛」(曾根崎心中)、「梅川・忠兵衛」

文楽太夫 豊竹英大夫



豊竹英大夫 東京・国立小劇場で ©小川知子

「だめんず」と「賢女」

底にある狂気を掘り起こし、それを糧にして語らねばならないからだ。

単なる「アホな男」を演ずるだけなら、こんな消耗はないはずだ。床本をよく読むと、彼らは生まれも良く、仕事はきっちりこなして、将来を約束された身分だとわかる。それに比べ、ヒロインはすべて下級の遊女という、極めて恵まれない立場であった。

生きている現在より、来世でのしあわせに誰もが価値観を置いていた当時、彼女ら遊女にとり、好きな人と心でできることは、この上ないよこびであったと想像できる。

恵まれていたはずの徳兵衛や忠兵衛や治兵衛がなぜ、普通に生きていけなかったのかは理解しがたい。しかし、極限状況で義太夫節を発声するさなか、彼らの魂を揺さぶり、異常な次元に導いた狂気が、自らの体内に叫びとなってよみがえり、一体となる瞬間があるのだ。